

CaseStudy Point

- ▶ 1400台の検証用スマートフォンを管理
- ▶ 端末の現状を把握し、コスト管理を最適化

今後の展望

「やりたい事が最短距離で実現できる製品」
だからこそ、業務の引継ぎも安心

現在、ガラケーを除く1400台の検証用携帯端末をLanScope Anで管理している同社。他の業務を複数兼務しながら、検証端末の管理業務を一手に担っている今井氏は、今後の管理体制の変更も視野に入れている。

「LanScope Anはこの画面ではこういう情報が表示されるだろうなとイメージ通りの動きをしてくれるので、使いやすいです。検索機能も充実しているので、知りたい情報に簡単に辿り着けます。忙しくまとまった時間がとれないため、やりたい事が最短距離で実現できる製品こそ、管理者が求める製品だと思いますね。目立たない部分ですが、情報を管理するツールでは欠かせない点だと思いますし、LanScope Anはその点を満たしていることが魅力的だと思います。今後、管理業務を後任に引き継ぎ予定ですが、その際にも安心ですね。」(今井氏)

LanScope Anの導入は、新規の検証端末購入費用や毎月の通信固定費、さらに検証端末を管理する人件費の削減をもたらし、検証端末管理のあるべき姿を実現させた。

これからもLanScope Anはセキュリティ対策だけでなく、コスト削減を実現できる管理ツールとして同社の事業発展を支えていきたい。



○LanScope Anを活用した今後の管理体制について語る今井様



○NHN comico様のオフィス風景

NHN comicoが、検証端末を最適管理 資産管理機能を最大限に活用した「コスト削減」の方法とは



エムオーテックス株式会社

【大阪本社】〒532-0011 大阪市淀川区西中島5-12-12 エムオーテックス新大阪ビル
【東京本部】〒108-0075 東京都港区港南1-2-70 品川シーズンテラス5階
【名古屋支店】〒460-0003 名古屋市中区錦1-11-11 名古屋インターシティビル3階
【九州営業所】〒812-0011 福岡市博多区博多駅前1-15-20 NOF博多駅前ビル2階

本事例内容についてのお問合せ **0120-968995** 受付時間 9:30-12:00 / 13:00-17:30
(月～金曜日 ※祝祭日除く)

お問合せ先:

COMICO NHN comico株式会社
<http://www.nhn-comico.com/>

■ 設立 : 2013年4月1日 ■ 従業員数 : 170名
■ An : 1400台 ■ 導入機種 : Android, iOS

NHN comico株式会社(以下NHN comico)は、グループ共通の理念である「Next Human Network=インターネットに広がる無限の可能性を活かした人と人とのつながり、豊かな社会の実現」に貢献するサービスを提供している。

またNHN comicoは、「comico」など電子コミック・ノベル事業を中心とした事業をはじめ「LINE:ディズニー ツムツム」「妖怪ウォッチふにふに」「マーベル ツムツム」などスマートフォンゲーム事業を展開するNHN PlayArt株式会社、PCオンラインゲーム事業を展開するNHN ハンゲーム株式会社、サーバ・ネットワークの構築やセキュリティサービス、ECソリューション開発、広告サービスを展開するNHN テコラス株式会社などの事業持株会社でもある。



スマートコミック&ノベルサービス業界を牽引するNHN comico株式会社(以下NHN comico)が採用したMDM (Mobile Device Management) が[LanScope An]だ。

いまやセキュリティ対策を目的としてMDMを導入する企業は珍しくないが、今回のNHN comicoのように資産管理を目的としてMDMを導入し、「コスト削減」を実現した企業は多くはないだろう。アプリやWebの開発を行う多くの企業が苦労している検証端末の管理において、正確な資産管理を実現できた経緯とその効果を総務チームの今井氏に伺った。

導入経緯

「増え続ける検証端末と、利用者情報をいかにリアルタイムに管理できるか」が最大の課題

スマートフォンゲーム事業を手がける同社で欠かせない業務の1つが、リリース前の「動作検証」だ。検証という用途上、AndroidやiOSなどのOSの種類や機種、OSバージョンや回線契約の有無など、必要な検証端末の状態は多岐に渡り、管理が煩雑になりがちだ。5拠点およびグループ企業4社にまたがる約1400台の管理となると、保有している検証端末の状況を正確に把握することは想像以上に困難だ。さらに、検証端末はアプリのリリースタイミングやその時々の検証に応じて利用者が変わる。そのため多種多様な検証端末と、流動的に変更される利用者に対応できる管理方法が求められるというわけだ。

「新しい機種が発売されたタイミングや検証端末の台数が足りないという理由で、開発者からIT購買部門に月に20台ほど端末購入の申請が来ます。当時は検証端末の保有状況を把握できていなかったため、必要と言われれば購入申請を承認するしかないというのが現状でした。」と1年前のことを振り返りながら話すのは、総務チームの今井氏だ。



○NHN comico株式会社 総務チーム 今井様

検証端末の保有状況を把握できていないから、購入を承認するしかない。そしてまた管理する検証端末が増え、管理が回らなくなる。増え続ける検証端末と、変わる利用者情報をいかにリアルタイムに紐付けて管理できるのが課題だったと今井氏は話す。

さらに、全く使われていない検証端末の通信契約が継続したままになっていたことが発覚し、利用状況の把握と適正なコスト管理が社内でも強く求められるようになっていた。そこで導入を検討したが、LanScope Anだ。

「いくつかのMDMを比較検討した結果、どの製品もセキュリティ機能には長けていましたが、端末管理の面では大きな違いがありませんでした。しかし、LanScope Anはセキュリティ対策だけでなく資産管理の機能も充実していたので、初めて画面を見た際に1000台以上の端末の管理がすぐにイメージできました。」(今井氏)

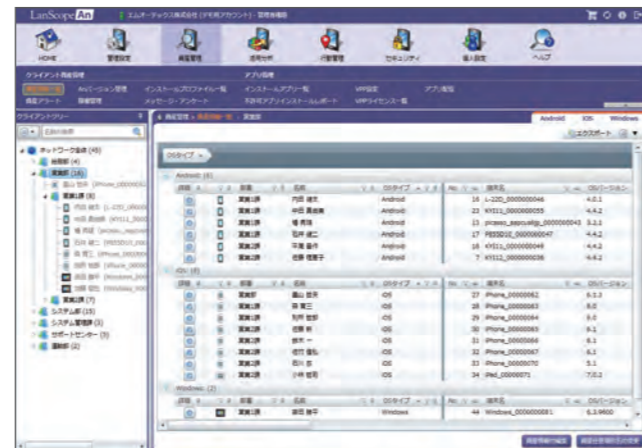
- ①検証端末の情報(機種、OS、OSバージョン、通信契約の有無)
- ②検証端末の稼働状況
- ③検証端末に紐づく利用部署、利用者情報

必要性を感じていたすべての管理を、LanScope Anならできると感じ、今井氏は導入に踏み切った。

導入効果①

無駄な検証端末の新規購入を阻止し、LanScope Anの利用料を上回るコスト削減に成功

以前に検証端末の情報をExcelファイルで管理しようと台帳を作成したものの、頻繁に発生する利用者変更や機種の増加に情報更新が追いつかなくなり、Excel管理は運用に乗りなかった。



○資産情報一覧画面(画面はサンプル)

しかし、LanScope Anの「資産情報一覧」画面を確認すれば検証端末の情報は、一目瞭然だ。電話番号など一部の限られた情報だけでなく、機器名、OSタイプ、OSバージョン、そして加入キャリアというように検証端末の管理に必要な情報を自動で取得し、全端末分、台帳形式で一覧表示する。端末情報の正確性をいかに維持するかという課題は、これで解決できたというわけだ。

同社は、検証端末に管理Noを記載したシールを貼って、「資産情報一覧」画面のNoと紐付けて管理をしている。Noで検索すれば該当端末を簡単に見つけることができるので、利用者名の変更などがスムーズだ。

さらに、例えば「AndroidのOSバージョン4.4.2の端末がほしい」と申請があった際には、「資産情報一覧」画面でAndroidのOSバージョン4.4.2の検証端末が社内に何台あるのか、現在の所有者は誰なのかを簡単に確認することができる。所有者がなかった場合はそのまま貸し出し、使用中の場合はその利用部署に直接連絡するようにエスケーションをするという。

これまでは、申請があったものは全て購入するというフローだったがLanScope An導入後は、申請内容に一致する検証端末がなかった場合にのみ購入するようになり、コスト削減につながっている。

「無駄な検証端末の購入を毎月数台抑えるだけで、LanScope Anの利用料をペイすることができています。この費用対効果の高さには満足していますね。」(今井氏)

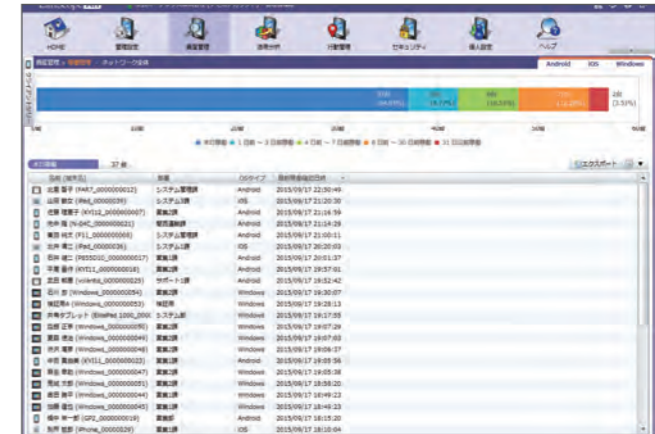
導入効果②

休眠端末を定期チェックし、不要な通信コストを削減

今井氏は、LanScope Anの「稼働管理」画面で、未稼働端末を定期的にチェックしている。一定期間未稼働になっている検証端末があれば、利用部門に状況を話し、通信契約が不要の場合は通信契約を解除するという。

「使っていないのに毎月一定の通信コストがかかるのは無駄ではないですかね!使わないなら契約を切って、使うときは社内のWi-Fi環境に繋がれば済むわけなので。本当にこの稼働管理レポートには助かっています。今までは通信契約を切りたくても、それを判断する情報がなくて困っていたので、大助かりです。」(今井氏)

この運用を開始してから、毎月 unnecessary 回線をピックアップして通信契約を解除し、通信固定費の削減を実現している。



○稼働管理画面(画面はサンプル)

導入効果③

要となる組織情報のメンテナンスも問題なし!コスト管理のあるべき姿を実現

同社では、グループ企業4社の端末もまとめて管理している。企業ごとに利用部署のグループを作成し、その配下に端末を紐付け、毎月の費用も部署ごとに負担するという管理体制だ。

「2週間に1回ほど人事異動があるので、利用者の管理が課題でした。Excelで管理していた頃はリアルタイムに利用者の変更ができていなかったため、費用を負担する部署と認識が合わないことが度々ありました。LanScope Anなら、デバイスを選択し旧部署から新部署にドラックアンドドロップすれば、利用部署を変更できるので、細かな組織異動にも対応できています。情報を管理画面からエクスポートしないと情報変更できないツールも多いですが、1台ずつ簡単に管理画面上で情報変更できる点が簡単なので、気に入っています。」(今井氏)

LanScope Anを約1年間運用し、実感した導入効果について今井氏はこう語る。

「検証端末の現状を把握できないことが、コスト管理をする上で一番の悩みでした。毎月支払っているコストが高いのか低いのか、削減できる部分があるのか、適正なコストが一体いくらなのかを見出すことができませんでした。でも今は、LanScope Anがあるおかげで、検証端末とコストを紐付ける「根拠」(検証端末の情報、利用者情報、稼働情報)を明確に把握できるようになりました。現状をしっかりと把握できているからこそ、必要な判断も迅速にできるようになり、コストを削減できているのだと思います。もし、今できていることをLanScope Anなしでやろうとした場合専任の担当者が2人、費用に換算すると毎月約100万円は必要だと思います。この価値は非常に大きいですね。」(今井氏)